

韓国高齢者の社会活動と QOL の関係

金 貞 淑・李 鳳 和
(慶尚南道庁) (保健福祉家族部次官)

尹 靖 水・張 英 恩
(梅花女子大学) (岡山県立大学大学院)

朴 志 先・中 嶋 和 夫
(岡山県立大学大学院) (岡山県立大学)

抄録：本研究は、高齢者の社会活動と主観的幸福感の関連性を明らかにすることを目的とした。調査対象は、韓国全州市と沃川郡の老人福祉会館を利用している 65 歳以上の高齢者とした。本人の記入が明らかで、性、年齢、教育歴、社会的活動、主観的幸福感のすべての回答に欠損値がない 345 人を集計対象とした。性、年齢、教育歴を統制変数として、また社会活動を独立変数、主観的幸福感を従属変数とする因果関係モデルのデータへの適合度を構造方程式モデリングで検討した。その結果、モデルの適合度は CFI が 0.89、RMSEA が 0.07 であった。主観的幸福感に対する性、年齢、教育歴、社会活動の寄与率は 17.0% であった。このことは、今後の地域の高齢者対策において、社会活動をどのように支援するかが彼らの QOL 向上にとって重要な課題となることを示している。

I 緒 言

最近、韓国では急速な都市化ならびに核家族化の進展に伴い、高齢者のみならず若年層においてさえ、地域活動や団体活動、近所付き合いなどといった住民相互の社会関係の希薄化⁽¹⁾が生じ、地域福祉計画の発展性が危惧されている。従来の研究は、社会関係の希薄化に起因する社会活動の狭小化はしばしば

孤独感や疎外感を強め⁽²⁾⁻⁽³⁾、さらには精神的健康を悪化させることを報告している⁽⁴⁾⁻⁽⁵⁾。さらに高齢者の社会活動については、離脱理論 disengagement theory⁽⁶⁾、活動理論 activities theory⁽⁷⁾⁻⁽⁸⁾、継続性理論 continuity theory⁽⁹⁾⁻⁽¹¹⁾が開発され、これまでそれに関連した多くの実証研究が展開されている⁽¹²⁾⁻⁽²⁰⁾。それら研究を概観すると、社会活動が高齢者の主観的幸福感や QOL を規定する重要な要因として位置付けられている⁽¹⁷⁾⁻⁽²¹⁾。さらに、社会活動は高齢者自身の健康にポジティブな影響を与えるだけでなく、地域社会の活性化にとっても有益な結果をもたらす⁽²²⁾ものとして注目を受けている。ただし、韓国では社会活動の加齢に伴う変容過程やその QOL への影響度は適切かつ十分に検討されていない。

本研究では、韓国の今後の地域福祉計画策定時の指針を与えることをねらいとして、地域で生活している高齢者の社会活動と主観的幸福感の関連性を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ 研究方法

本研究では、韓国の都市と農村を代表する 2 地域（全州市と沃川郡）の老人福祉館 4 箇所を選定し、その利用者 800 人を対象に調査を行なった。調査対象の選定は、前記老人福祉館の福祉専門職員が行ない、彼ら調査員は調査対象に調査の目的を説明し、調査協力の有無を事前に確認し、最終的に同意を得ることができた者のみを調査対象に限定した。なお調査は調査票の配布後にも拒否できるものとした。調査員は、調査票を個別に配布し、その後、秘密保持のため厳封された調査票を回収した。調査は平成 18 年 11 月に調査票を作成し、同年 12 月に実施した。

調査内容は、高齢者の属性（性、年齢、教育歴）、社会活動、主観的幸福感で構成した。これら調査内容のうち、社会活動は、先行研究⁽²³⁾⁻⁽²⁶⁾を参考に、20 項目で構成した。このとき、社会活動を「家庭外で展開される集団的な活動」と定義し、その内容を「地域団体活動」「地域奉仕活動」「学習活動」の 3 領域

(因子) で構成した。それぞれの項目についての参加状況の回答は、「参加していない (0 点)」「時々参加している (1 点)」「いつも参加している (2 点)」の 3 件法で求めた。主観的幸福感、PGC モラル尺度⁽²⁷⁾のうちの 5 項目(「私は現在昨年と相変わらず健康だと思う」、「家族や親戚、友人の往来に満足している」「年をとることは若い頃考えたことより良い」「若かった頃より、今が幸せだ」「今の生活に満足する」)で構成される生活に対する満足度(以下、生活満足度)で測定した。各項目に対する回答は、「いいえ (0 点)」「はい (1 点)」とし、またはそれに準じた回答方法により、主観的幸福感を向上させる方向に働く回答に 1 点、そうでない回答に 0 点を与えるものとした。

統計解析では、性、年齢、教育歴を統制変数として、また社会活動を独立変数、主観的幸福感を従属変数とする因果関係モデルのデータへの適合度および変数間の関連性を構造方程式モデリングで検討した。このとき、性は「女性」を 0 点、「男性」を 1 点とするダミー変数とし、教育歴は「未就学」「小学校卒業」「中学校卒業」「高等学校卒業」「大学卒業以上」の各カテゴリに 0 点から 4 点を付与した。前記モデルの適合度は、適合度指標の「CFI」Comparative Fit Index と「RMSEA」Root Mean Square Error of Approximation で判断し、パラメータの推定は WLSMV (mean-and variance-adjusted WLS) 法を採用した。CFI は独立モデルを比較基準とした場合のモデルとデータの乖離度の改善の程度を意味する指標、RMSEA は 1 自由度あたりの乖離度の大きさを意味する指標であり、前者は 1.0 に近いほど、後者は 0.0 に近いほど、適合性が高いと判断される。パスの有意性は、非標準化推定値を標準誤差で除した値に基づき判断し、その絶対値が 1.96 以上 ($p < .05$) であること統計学的に有意とした。なお、高齢者の社会活動と主観的幸福感を測定した尺度の信頼性は、Kuder-Richardson 第 20 公式 (KR-20) 信頼性係数で検討した。また本調査研究においては、回収された調査票のうち (558 人)、性、年齢、教育歴、社会活動、主観的幸福感のすべての項目を満たし、本人の自記入が確認できた 345 人を集計対象とした。以上の統計解析には SPSS 10.0、M-plus 2.14 を使用した。

Ⅲ 研究結果

1. 人口学的な属性の分布

集計対象 345 人は、男性 182 人 (52.8%)、女性 163 人 (47.2%) であった。平均年齢は 71.8 歳 (標準偏差 4.66)、男性が 71.9 歳 (標準偏差 4.66)、女性が 71.7 歳 (標準偏差 4.68) であり、統計学的に性差はなかった。教育歴は、「未就学」52 名 (男性 5 名、女性 47 名)、「小学校卒業」78 名 (男性 26 名、女性 52 名)、「中学校卒業」が 46 名 (男性 28 名、女性 18 名)、「高等学校卒業」が 102 名 (男性 65 名、女性 37 名)、「大学卒業以上」が 67 名 (男性 58 名、女性 9 名) で、統計的には男性が女性に比して高学歴であった ($p < .01$)。

2. 社会活動の実施頻度

社会活動 20 項目の実施頻度を表 1 に示した。回答カテゴリ「いつも参加している」に着目すると、「地域団体活動」では「講、同窓会など」(39.7%)、「宗教活動、教会、お寺など」(33.6%)、「老人会活動」(27.5%) など、一般的に参加頻度が高い傾向にあった。反対に、「地域奉仕活動」では、最も参加頻度が高い「社会福祉の分野」(10.4%) における奉仕活動でさえ、およそ 10% 程度と参加頻度が低い傾向にあった。「学習活動」では、「教育プログラム (外国語、パソコン、文字を読む・書くこと) など」(25.2%)、「音楽プログラム (歌、踊りなど)」(22.3%) の参加頻度は高い傾向にあったが、「資格証のための技術講座」(6.4%) への参加頻度は低い傾向にあった。

3. 社会活動と主観的幸福感の関係

社会活動 (20 項目) において、KR-20 信頼性係数は 0.89 (「地域団体活動 (7 項目)」0.72, 「地域奉仕活動 (8 項目)」0.89, 「学習活動 (5 項目)」0.65), 主観的幸福感 (5 項目) では 0.63 であった。

次に、社会活動と主観的幸福感の関連性を構造方程式モデリングで検討し

韓国高齢者の社会活動と QOL の関係

表 1 社会活動（20 項目）の実施頻度

質問項目	回答カテゴリ		
	参加していない	時々参加している	いつも参加している
地域団体活動			
X 1. 班常会	238(69.0%)	72(20.9%)	35(10.1%)
X 2. 町の体育会または行事	177(51.3%)	114(33.0%)	54(15.7%)
X 3. 宗教活動, 教会, お寺など	125(36.2%)	104(30.1%)	116(33.6%)
X 4. 老人会活動	140(40.6%)	110(31.9%)	95(27.5%)
X 5. セマウル指導者, 婦人会など各種団体活動	247(71.6%)	66(19.1%)	32(9.3%)
X 6. 趣味活動, 山登り, ゲートボールなどの運動クラブ	148(42.9%)	118(34.2%)	79(22.9%)
X 7. 講, 同窓会など	120(34.8%)	88(25.5%)	137(39.7%)
地域奉仕活動			
X 8. 社会福祉の分野	204(59.1%)	105(30.4%)	36(10.4%)
X 9. 教育及び文化芸術活動の分野	228(66.1%)	89(25.8%)	28(8.1%)
X 10. 地域社会ボランティア活動の分野	220(63.8%)	96(27.8%)	29(8.4%)
X 11. 保健医療の分野	262(75.9%)	66(19.1%)	17(4.9%)
X 12. 交通分野	283(82.0%)	46(13.3%)	16(4.6%)
X 13. 環境分野	251(72.8%)	71(20.6%)	23(6.7%)
X 14. 国際協力や国際活動の分野	302(87.5%)	33(9.6%)	10(2.9%)
X 15. 運動及びレクリエーション活動の分野	214(62.0%)	100(29.0%)	31(9.0%)
学習活動			
X 16. 教育プログラム (外国語, パソコン, 文字を読む・書くこと) など	172(49.9%)	86(24.9%)	87(25.2%)
X 17. 資格証のための技術講座	286(82.9%)	37(10.7%)	22(6.4%)
X 18. 音楽プログラム (歌, 踊りなど)	174(50.4%)	94(27.2%)	77(22.3%)
X 19. 趣味プログラム (書道, 絵など)	246(71.3%)	61(17.7%)	38(11.0%)
X 20. 健康講座	192(55.7%)	105(30.4%)	48(13.9%)

単位: 名 (%)

た。このとき、社会活動に関しては「地域団体活動」「地域奉仕活動」「学習活動」を第 1 次因子、「社会活動」を第 2 次因子とする 2 次因子分析モデルを、また「主観的幸福感」に関しては 1 因子モデルを構築した。統計解析の結果、社会活動から主観的幸福感に向かうパス（標準化係数）は 0.45 と統計学的に有意であり、またモデル全体の適合度は $\chi^2(df) = 332.448 (105)$, $CFI = 0.89$, $RMSEA = 0.07$ と概ね良好であった。主観的幸福感に対する年齢、性、学歴、社会活動による説明率は 17.0% であった。

韓国高齢者の社会活動と QOL の関係

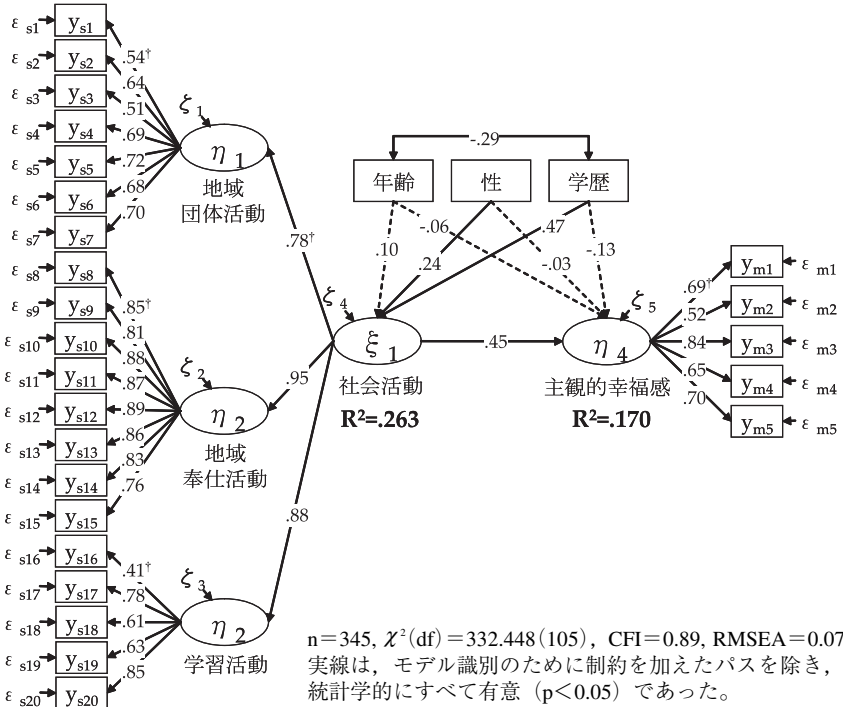


図 1 社会活動と主観的幸福感の関係性

IV 考 察

活動理論 activity theory⁽⁸⁾は、高齢者の主観的 QOL を社会的相互作用 social interaction の活動水準と結びつけ、「活動度が大きければ大きいほど、生活満足度は高い」とする理論である。欧米の研究に対するレビューでは⁽²⁸⁾、高齢者における社会活動の主観的 QOL に及ぼす影響度（寄与率）は 1% から 9% の範囲であると報告されている。しかし、それらの研究は誤差を排除できない統計解析を用いていることからより正確な関連性が抽出されていないこと、また韓国や日本ではこれまで高齢者の社会活動と主観的 QOL の関連性が必ずしも十分に検討されているわけではないことから研究に着手した。さらに韓国や日

本においてほとんど研究がなされていないことは、高齢者の QOL にかかわる施策をどのように展開すべきかといった指針も実証的な裏付けがないまま提起されている可能性が高いことを示唆している。

そこで本研究は、高齢者の社会的活動を、「地域団体活動」「地域奉仕活動」「学習活動」の3領域で構成し、それら社会活動と主観的幸福感の関連性を検討することを目的に行った。本研究では、社会活動と主観的幸福感に関する因果関係のパス図を、性、年齢、教育歴を加味して構築し、それを構造方程式モデリングを用いて解析した。この解析方法の選択は変数の誤差を排除できること、さらにはモデルのデータへの適合度を判断することから適切な選択であったと言える。また集計対象を高齢者全般ではなく、自分で回答できる者に限定したことも、社会活動や主観的幸福感の回答形式から判断して妥当であったと言える。

その結果、高齢者における社会活動と主観的幸福感に関する因果関係モデルがデータに十分適合すること、さらにまた、前記因果関係モデルにおける主観的幸福感に対する寄与率は17.0%となることが示された。この寄与率は、従来の研究⁽²⁸⁾が示していた数値に比して、高い数値となっていた。その理由として適切な解析方法の採用が指摘できよう。なお、前記因果モデルがデータに適合したことは、活動理論⁽⁸⁾を支持する実証的な根拠と言える。社会的活動に関する欧米の研究を概観すると⁽²⁵⁾、1960年代は活動理論や離脱理論を実証する目的で、主観的幸福感や生活満足度との関連が追求され、1970年代から80年代においては、主観的幸福感や生活満足度の説明変数のひとつとして、多くの研究に用いられたが、80年代後半以降は研究が減少し、その後、ボランティア活動⁽²⁹⁾、レジャー活動といった個々の活動への参加に関する研究が増大している。とりわけ高齢者のボランティア活動への参加は、高齢者にとっては役割喪失への対処であり、自身の健康や社会との交流、生活満足度が増進するものとされている⁽³⁰⁾⁻⁽³¹⁾。ただし、フォーマルなボランティア活動を中心とする社会活動は生活満足度に対し負の相関がある⁽¹¹⁾とも指摘されている。他方、ボランティア活動の参加者の生活満足度は高いものの、それはボランティア活動

参加者の社会的経済的な位置、性、教育程度、健康度を基礎とするものであって、ボランティア活動そのものの効果ではないとも指摘されていた^{(31)–(32)}。本研究では、この点について、地域奉仕活動をインフォーマルとフォーマルに区分して調査しなかったこと、また QOL を生活満足度の視点から測定しなかったことから、十分な検討ができなかったが、今後の高齢者の QOL の維持・向上の重要性を勘案するなら、前記視座からのさらなる詳細な社会活動の QOL への影響についての検討が望まれよう。

さらに、本研究においては、社会活動に関連する人口学的な要因についても検討したところであるが、教育歴が社会活動に対し正の相関を示すことが明らかになった。このことは Chamber⁽²⁹⁾が支持している「連続理論」を裏付ける結果と思料する。このことは、交友関係の基礎であるソーシャル・ネットワーク⁽³³⁾の縮小が学歴の低い者に派生しやすいことを意味している。ただし、高齢者のソーシャル・ネットワークの測定方法や高齢者の社会活動に関する研究がいまだわが国では乏しいことを勘案するなら、早急にそれら概念モデルを検討すると同時に、その測定方法についても検討を加えた上で、今後とも慎重な検討が必要となってこよう。

以上まとめると、本研究では、高齢者における活動理論の有用性を、主観的幸福感と社会活動の関係において検討し、活動理論が支持されるという結果をえることができた。今後はさらに、対象の地域差を考慮した主観的幸福感や生活満足度と社会活動に関する因果モデルの適合性を検討することによって、より重要な知見がえられるものと期待でき、このことが活力ある高齢者の地域福祉計画の立案にとって寄与できる成果は決して少なくないものと思料する。

参考文献

- (1) Choi Jong-Hyuck, Lee Yeon. A Study on the Process of Community Organizing. 7, 289–320, 2002.
- (2) Daniel W. Russell. UCLA Loneliness Scale (Version 3) : Reliability, Validity, and Factor Structure. *Journal of Personality Assessment*, 66(1), 20–40, 1996.
- (3) Joseph Stokes, Ira Levin. Gender Differences in Predicting Loneliness From Social Network Characteristics. *Journal of Personality and Social Psychology*, 51(5), 1069–1074,

- 1986.
- (4) Toni C. Antonucci, Rebecca Fuhrer. Jean-Francois Dartigues. Social Relations and Depressive Symptomatology in a Sample of Community-Dwelling French Older Adults. *Psychology and Aging*, 12(1), 189–195, 1997.
 - (5) Mi-Sook Song, Hyun-Jong Song, Jin-Yong Mok. Community Based Cross-sectional Study on the Related Factors with Perceived Health Status among the Elderly. *Journal of the Korea Gerontological Society*, 23(4), 127–142, 2003.
 - (6) Cumming E, Henry EW. *Growing old ; The process of disengagement*. Basic Books, New York, 1961.
 - (7) Friedmann, E. A. and R. J. Havighurst, *The Meaning of Work and Retirement*, Chicago : University of Chicago Press, 1954.
 - (8) Lemon, BW., Bengtson, VL., Peterson, JA. An exploration of the activity theory of aging ; Activity types and life satisfaction among-in-movers to a retirement community. *Journal of Gerontology*, 27, 511–523, 1972.
 - (9) Atchley, R. C. *Aging : Continuity and Change*, Belmont, California, Wadsworth, 1987.
 - (10) Atchley, R. C. *Social Forecasting and Aging* (fifth edition), Wadsworth, 1988.
 - (11) Longino CF Jr, Kart CS. Explicating activity theory : a formal replication. *J Gerontol*, Nov ; 37(6), 713–722, 1982.
 - (12) Hoyt DR, Kaiser MA, Peters GR, Babchuk N. Life satisfaction and activity theory : a multidimensional approach. *J Gerontol*, Nov ; 35(6), 935–941, 1980.
 - (13) Tinsley HE, Teaff JD, Colbs SL, Kaufman N. A system of classifying leisure activities in terms of the psychological benefits of participation reported by older persons. *J Gerontol*, Mar ; 40(2), 172–178, 1985.
 - (14) Graney MJ. Happiness and social participation in aging. *J Gerontol*, Nov ; 30(6), 701–706, 1975.
 - (15) Rose AM. The subculture of the aging, a topic for sociological research. *Gerontologist*, 2, 123–127, 1962.
 - (16) Havighurst RJ, Neugarten BL, Tobin SS. Disengagement, personality and life satisfaction in the later years. In *Age with a future*, ed. By Hansen PF, 419–425, Munksgaard, Copenhagen, 1963.
 - (17) Adams, D. L. Correlates of satisfaction among the elderly. *Gerontologist*, 11, 64–68, 1971.
 - (18) Willson, W. Correlates of avowed happiness. *Psych. Bull.*, 67, 294–306, 1967.
 - (19) Larson, R. Thirty years of research on the subjective well-being of older adults, *Journal of Gerontology*, 33, 109–125, 1978.
 - (20) Shuji Hashimoto, Rie Aoki, Akiko Tamakoshi, Satomi Shibazaki, Masaki Nagai, Norito Kawakami, Akira Ikari, Toshiyuki Ojima, Yoshiyuki Ohno. Development of index of

- social activities for the elderly. *Nihon Kousyueisei Zasshi*, 44(10), 760-768, 1997.
- (21) Kim Mee-Ryoung. The study of Comparing Factors of Affecting on the Quality of Life for Young-Old Women and Old-Old Women. *Korean Journal of Social Welfare*, 58(2), 197-222, 2006.
 - (22) Masayo Ido, Norito Kawakami, Hiroyuki Shimizu, Yoshinari Okamoto, Yoko Usui. Factors affecting active-life orientation among the elderly in a community in Japan and its relationship to social activities, *Nihon Kousyueisei Zasshi*, 44(12), 894-990, 1997.
 - (23) Fukumi Hiragami. Cross-validity and Aging of the Social Activities Scale for Older Adults in the Community. *Kibi International University Hokenfukusi Kenkyusyo Kenkyu Kiyo*, 2, 67-64, 2001.
 - (24) 玉腰暁子他, 全国市町村における高齢者の社会活動に関する実態調査, *公衆衛生*, 1994, 58(10), 738-742.
 - (25) 松岡英子, 高齢者の社会参加とその関連要因, *老年社会科学*, 1992, 14. 15-23.
 - (26) Jung Kyoung-Hee, Oh Young-Hee, Suk Jae-Eun, Do Sei-Rok, Kim Chan-Woo, Lee Yun-Kyoung. 2004 年度全国老人生活実態および福祉ニーズ調査〈第 9 章老人の余暇活動実態〉韓国保健社会研究院, 保健福祉部, 2005
 - (27) Powell-Lawton, M. : The Philadelphia Geriatric Center Morale Scale : a revision. *Journal of Gerontology*, 30, 85-89, 1975.
 - (28) Okun MA, et al. The social activity/subjective well-being relation. *Research on Aging*, 1984, 6(1). 45-65
 - (29) Chambre SM. Volunteerism by elderly : Past trends and future prospects. *The Gerontologist*, 1993, 33(2). 221-228
 - (30) Swartz EI. The older adult : Creative use of leisure time. *The Journal of Geriatric Psychiatry*, 1978, 11. 85-87
 - (31) Hunter KI and Linn MW. Psychosocial differences between elderly volunteers and non-volunteers. *International Journal of Aging and Human Development*, 1980, 12. 205-213
 - (32) Ward RA. The meaning of voluntary association participation to older people. *Journal of Gerontology*, 1979, 34. 438-445
 - (33) 古谷野亘, 社会的ネットワーク, *老年社会科学*, 1991, 13. 68-76

The relationship between social activities and subjective well-being of the elderly

Jung-Suk Kim, Bong-Hwa Lee, Jungsoo Yoon
Young-eun Chang, Ji-sun Park and Kazuo Nakajima

The purpose of the study was to examine the relationship between social activities and subjective well-being in community-dwelling elderly people. The survey was administered to the elderly persons of 65 years old or more who were using elder welfare centers in Jeonju-city and Okcheon-county, Korea. In our analyses, 345 complete data was used. We analyzed the relationship between social activities and subjective well-being controlling for sex, age, and educational status using structural equation modeling. Result showed that our model yielded statistically acceptable fit indices (CFI=0.89, RMSEA=0.07). Sex, age, educational status, and social activities explained 17.0% of the variance in subjective well-being. This finding suggests that how their social activities should be supported for their QOL improvement is an important issue in the community.

Key words : Social activity, QOL, Causal model